

に自刃を命じて、恭順の姿勢を示したからである。総督の徳川慶勝はこれを長州藩の伏罪とみなし、諸藩に撤兵を命じた。これがのちに征討の不徹底とのそしりをうけるようになったのである。

二 第二次長州征討

第二次征長戦の開始

慶応元年（一八六五）四月、幕府は征長先鋒総督に前尾張藩主徳川茂徳もとのりを任命し（翌月、紀州藩主徳川茂承に交代）、さらには將軍が征長のために進発することを布告した。「長州藩において、容易ならざる企てがある」という曖昧な理由による再征であった。將軍家茂は、予定どおり、五月十六日江戸城を出発し、東海道を西上して閏五月、上洛参内した。

この当時、第二次長州征討に関する諸藩の態度は表5—38のとおりである。この表をみる限りでは、雄藩といわれる諸藩はこの征討にほとんど賛同を示していなかったことが分かる。

その一方で、長州藩では、高杉晋作ら新しい勢力によって抗戦の姿勢をとっていた。

九月、將軍家茂は再上洛した。そして、参内して征長の勅許を得ることができた。ところが、幕府主導を好ま

表5—38 慶応元年4月～閏5月における第2次長州征討に関する諸藩の意見

藩主・旧藩主（藩名）	藩の意見
徳川慶勝（尾張藩主）	不可、長州藩内は同藩主以下に鎮静方を申し渡す再征の名義を明示すべし。
松平茂昭（福井藩主）	長州処分 ^の 諸藩主の諮問、評議を尽くすべき。 徳川家の興廃にも関係する重大事。
松平慶永（前福井藩主）	天下の乱階（乱の起こるきっかけ）になる。 朝意の本意を伺う。
池田茂政（備前藩主）	1次征長では寛典に処する。 寛典説を捨てず、再征の非を主張する所存。
池田慶徳（因州藩主）	再征の不可、決行はなされようが静観する。
浅野茂長（安芸藩主）	藩地を離れがたい事情あり、（池田慶徳の催促に対し）上坂は出来ない。 家老をして長州処分について斡旋中。
藤堂高猷（津藩主）	藩内の鎮静を凶らしめるべし。
脇坂安斐（龍野藩主）	一次長征で伏罪中、以後至当の処分待ち。再征は驚愕。徳川家の浮沈に関する切迫の時勢。
徳川茂承（紀伊藩主）	征討の名義不分明。
蜂須賀斉裕（阿波藩主）	慎重に考慮し、適宜の処置を行うべし。
細川慶順（肥後藩主）	鎌田家老は専断して征長軍の先鋒を望んだが、藩内の議論沸騰。藩主は再征の名義不分明。先鋒の任は辞退する。
黒田長博（筑前藩主）	再征不可、公に建議しなかった。
井伊直憲（彦根藩主）	征長旗本先鋒を請う。
井伊直安（興板藩主）	従軍する。
桜井忠興（尼ヶ崎藩主）	従軍する。
松平武聡（浜田藩主）	二念なく征討を行うべし。

（維新史料編纂事務局『維新史』第4巻より作成）

ない勢力からの強い抵抗にあい、長州藩の処分が決定できたのは、翌慶応二年（一八六六）正月二十二日であった。慶応元年（一八六五）十一月、幕府は三藩に対して、その攻略部署を伝達した。攻略口は第一次長州征討と同様の五方面であった。九州諸藩に限ると、萩口は薩摩藩を一番手、久留米藩を二番手に、小倉口は熊本・柳川・小倉・小倉新田・安志藩を一番手、筑前藩・佐賀藩を二番手とした布陣であった（『維新史』第四卷）。

幕府は正月の「処分内容」を長州藩に伝え、請け書の提出期限を五月二十九日とし、提出のない場合は六月五日をもって総攻撃を行うことを示した。しかし、長州藩は請け書を提出しようとしなかったため、戦争は避けられない情勢となった。

小倉藩の戦闘準備

小倉藩の対長州戦準備は二月に始まった。この時の軍事編制は次のとおりである。小倉藩士を分けて六備二小隊と称している。一番手、二番手などと称し、小隊は何某隊と唱える。

- 一番手（備） 中老島村志津摩（一二〇〇石）
- 二番手（備） 中老洪田見舎人（一七〇〇石）
- 三番手（備） 洪田見 新
- 四番手（備） 中老中野一学（二〇〇〇石）
- 五番手（備） 中老鹿島刑部（二〇〇〇石）
- 六番手（備） 小笠原織衛（一五〇〇石）

小隊長は外様番頭平井小左衛門（二〇〇〇石）と同じく高橋唯之丞（五〇〇石）である。この陣容で、六月四日一番手は古田ノ浦に、二番手は東台場に、三番手は門司ヶ関に、四番手は思永館に、五番手は西台場に、六番手は田野浦新開に出張した。そして、二・四・五の三備は順次交替任務につくように定められていた。

（『福岡県史』第三卷下冊二七五頁）

こうした臨戦態勢が敷かれる前に、領民には前回の第一次長州征伐と同様にいろいろな負担が課せられた。

三月 八日 御用干草（馬の飼料）三〇〇〇貫目

廿七日 六郡の農兵・准農兵並びに郷筒の名前を調べて書き出せる

達しが出る（四月四日に催促の触）。

四月廿六日 島村備・洪田見新備・小笠原織衛備の郡夫割などの触

五月廿一日 領内の被差別部落に対して、草鞋十万足の割当。

廿四日 六月朔日よりの農兵の番所詰め割

沓尾詰め二人 長井手永農兵

稲童詰め二人 元永手永農兵

文久新地詰め二人 平島手永農兵

大橋詰め四人 国作手永農兵

但し、一切賄い代とも一人前、昼夜にて七匁五分宛

六月 三日 三番備の郡夫増員二四〇人

十四日 軍用馬沓三〇〇〇足（仲津郡四五五足）

表5—39 農兵の応募人数（慶応2年）

郡	手永	農兵	郷筒	准農兵	小計
企救	富野	170	17	—	170
	津田	31		135	180
	小森	123		—	123
	片野	146		—	146
	城野	89		—	89
田川	今永	55	—	—	55
	伊田・添田 楠・上野 金田・猪膝	245	105	—	350
京都	久保	49	1	—	50
	黒田	48	2	—	50
	延永	99	1	—	100
	新津	99	1	—	100
仲津	元永	50	—	—	50
	国作	50	—	—	50
	長井	46	4	—	50
	節丸	38	22	—	60
	平嶋	50	—	—	50
築城	安武	38	12	—	50
	椎田	49	1	—	50
	角田	47	3	—	50
	八田	50	—	—	50
上毛	友枝	71	4	—	75
	三毛門	82	8	—	90
計		1,806		135	1,941
新田 小倉藩	久路土	26	—	—	26
	岸井	32	—	—	32
計		58	—	—	58

「六郡村名・籠数内外調子帳」（長井文書）
 （『豊津藩歴史と風土』第3輯19ページ）

また、各藩の宿陣は次のとおりであつた。

（『福岡県史』第三卷下冊 二七四～七五頁）

肥後熊本藩溝口某の兵広寿山、同藩長岡監物の兵蒲生村、筑後柳川の兵長延寺、豊後府内の兵大柳寺・徳蓮寺・廣聖寺、播州安志藩主御下屋敷

外に小笠原老岐守は小倉口軍奉行として開善寺、塚原但馬守は大目付として明福寺に出陣した。

（『小倉藤田弘策日誌』『福岡縣史資料』第八輯 六三三頁）

（福岡県文化会館編『慶応二年丙寅豊前国仲津郡国作手永大庄屋御用日記』）
 このように、多くの課役が申し渡されてあわただしさを増してきた。この時の農兵は表5—39のとおりであつた。そして、以下のように各藩の軍勢の駐兵が始まつた。

六月 三日 老中小笠原長行、開善寺へ着陣

十二日 幕府別手組三百人、小倉着、惣白羽織を用いる。隊長多賀

輓負

十四日 幕府千人組百六人、小倉着、仕度は惣黒装束にて襟丈は惣

白である。隊長西脇藤右衛門

十五日 幕府千人組百三十三人、小倉着、仕度右同断

十六日 肥後細川勢五千八百人、広寿山へ宿陣、家老長岡監物

十八日 肥後細川勢五千八百人、備大将溝口藏人小倉着

十九日 肥後細川勢千余人、小倉着

外に肥前唐津藩家老多賀長兵衛、同西脇東左衛門率兵出張

肥前島原勢 筑前本屋瀬駅に出張す

筑後柳川藩 青黄赤白黒の五備、城野村片野村へ宿陣

豊後竹田藩 同勢二千二百人、中川修理太夫

小倉藩の敗退

小倉藩と肥後藩を中心とする小倉口は、小倉領内での戦いとなった。六月十七日、長州藩の軍艦から田の浦や門司あたりを先制砲撃され、高杉晋作と山県有朋の率いる奇兵隊などから攻撃をうけた。前後して、幕府の千人隊や肥後藩の大部隊が到着した。七月三日長州軍は大里（現北九州市門司区）に進入、更に赤坂（現北九州市小倉北区）を攻略して小倉城下をめざそうとしたのである。小倉藩兵は肥後藩の応援でこれを撃退した。互角に戦っていたのはここまでである。長州藩が「四境戦争」と呼ぶこの戦いで、なんとか幕府軍が持ちこたえたのは芸州口にすぎなかった。この方面は幕府の精鋭部隊が戦っていたからである。しかし、そのほかでは長州藩が圧倒した。

やがて七月晦日に、小笠原長行ら幕兵は、にわかには軍艦で長崎に逃れた。これは、大坂在陣中の十四代將軍徳川家茂が没したとの報が入ったことによるとされているが、前線で幕閣を代表する最高指揮官が脱走したわけだから、全軍の崩壊はまぬかれない。この直前、中心部隊の肥後藩兵は陣払いし、諸藩もやがて同じ行動をとったのである。

そして八月一日、小倉藩は小倉城に火を放ち、孤立の中での戦いを強いられた。本営を田川郡に移しての抵抗・持久戦に入り、戦線を企救郡と田川・京都両郡の境に後退させて長州軍と対峙した。更に、藩庁は田川郡香春に移した（これ以降、藩庁

を仲津郡豊津に藩庁を移すまで、香春藩という）。また、世子豊千代丸・藩主忠幹未亡人は警護の家臣とともに肥後熊本に落ちのびていた。実は、九代藩主小笠原忠幹は前年の慶応元年（一八六五）の九月に亡くなっていたが、時局の厳しい時にあつてひた隠しにされていた。

慶応二年の慶応二年八月一日小倉城の自焼と時を同じくした。この一揆は、苅田辺から発生してまたたく間に新津手永・久保手永・黒田手永と波及し、大庄屋・庄屋役宅を打ちこわして、翌二日には仲津郡・築城郡・上毛郡にも波及した。京都郡の打ちこわし勢は同郡行事村の正八幡宮に集結して、村々の御水帳焼亡を目標に掲げた。水帳の焼却については、上毛郡の首魁清次郎は「水帳をなくすれば、税金を出す必要がなくなる」（『築上郷土史讀本』『福岡縣史料叢書』第八輯所収）ということであった。

京都郡の一揆は七曲峠（現、田川郡香春町と京都郡勝山町の境）まで押し寄せた。仲津郡大庄屋の国作昇右衛門は八月三日、仲津郡筋奉行の和田藤左衛門に対して出動を要請した。翌四日に鎮圧隊が到着したため、一揆は鎮静した。この一揆全体の動向については、表5—40を参照して頂きたい。

表5-40 慶応二年の百姓一揆の動向

郡名	日	一揆のあらまし
京都郡	一日	藩権力の象徴である小倉城の自焼と同時に一揆が勃発した。「刈田辺より百姓一揆逢起」(慶応二丙寅「仏山堂日記」)し、新津手永の大庄屋役宅を打ちこわし、家財を積み立て焼き払う。久保七右衛門宅、末松安右衛門宅、黒田喜左衛門宅も焼き払う。それより、行事村(現行橋市市街)に押し移り、町家を夥しく打ちこわした(「仏山堂日記」)。
	二日	一揆は郡中一円になる。行事村正八幡宮に集合し、村の水帳を焼き払うべしと決定した。そして延永健右衛門宅を打ちこわして後、二手に分かれた。一手は役宅を打ちこわしながら、村上仏山の居村の稗田村方面にやってきた。貫一郎方は金子五〇〇両ほど・米穀を出して難をのがれた。そして、上田川原に集合して評議。もう一手は、既に、久保新町に押し寄せ、箕田・矢山方面に向かおうとした。そこで、郡代から派遣された鎮圧隊の発砲によって、散々になって逃げ帰った(「仏山堂日記」)。
上毛郡	二日	二日より京都・仲津・築城・上毛諸郡の富豪及び庄屋の宅を襲い、乱暴狼藉を極めた(「築上郷土史読本」「福岡縣史料叢書」第八輯所収)。
	三日	我が上毛郡では八屋村清兵衛が首魁となつて一揆を起こした。清兵衛は、八屋下町の目明かし虎蔵の所に入入りしている無頼の徒で、小倉變動の際、小倉におつて各所に暴動が起こるのを見て、八屋に帰村して三日に暴動を起こし同町の者を勧誘し、まず代屋という酒屋を荒した(同)。
	四日	宇島に入って、万屋を襲い、酒槽を打ちこわし、造酒四〇〇石を流し捨て、いったん八屋賢明寺に集合(同)。
	五日	今市方面に出て、大村の庄屋宅を荒らし、それより各所を荒し回つた(同)。
一揆の後始末	二日	久保新町では、役人が一人鉄砲で打ち留め、九人を召し捕り、そのうち、三人はすぐに新町で斬罪、鉄砲で殺された一人の首とも晒された(一つは新町に獄門、三つは行事で獄門、外の五人は香春に引つ張られた)。
	四日	杵尾村(京都郡)平次郎は斬首、晒しもの
	五日	夕刻、郡代高来作之丞が兵十余人を引き連れ、発砲して鎮圧したので一揆勢は逃亡した(「築上郷土史読本」「福岡縣史料叢書」第八輯所収)。
	一三日	八屋村(上毛郡)清兵衛は斬首、晒しもの

(「仏山堂日記」、『築上郡志』、『国作手永大庄屋日記―慶応二年』)

三 長州との終戦交渉と小倉藩の「開国」

藩主忠忱の肥後避難 豊千代丸(十代藩主忠忱)と故忠幹の夫人一行は、七月三十日に小倉から田川郡香春の御茶屋

に避難した。肥後に避難したのは、豊千代丸、故忠幹夫人、姫君二人、千束藩主故小笠原備後守貞謙の遺児、故小笠原敬次郎の遺児を中心に、奥向きの女中衆老女三人・中老三人・お側四人・その他一七人と下女十数名であった。警護の藩士は、家老